

# あそ 11

2019



初夢や馬のたてがみ火焰なる  
馬車馬の放屁を浴びる雪間風  
野馬肥えて都井の岬は瑠璃の海  
月白や鬣を噛む野馬の影  
冬の月杭に繋ぎし驢馬の影



# あそ

十一月

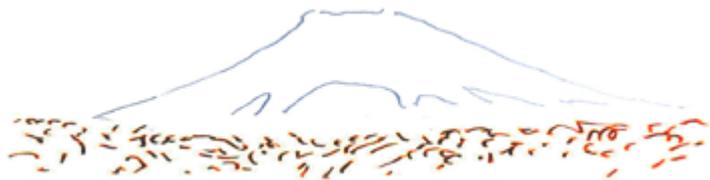


須賀忠男

雪降ると

東京 佐藤 喜孝

寝ころぶと富士の見えたり花の雲  
子守唄 忘れたさきはほたる草  
人の居るところへゆく日赤とんぼ  
忘れゆくもののひとつに晝の月  
かまきりの斧をきれいに望の月  
馬追の影の上れる障子かな  
雪降るとひとり湯を立て湯を捨つる



三重

長崎 桂子

九月

緑陰の風やさしき故ゆるり漕ぐ  
逃げられて悔し蚊取線香炷く  
秋暑し早朝夕暮庭仕事  
曇天急雨やつと日差や法師蟬  
強風大雨夜通し襲ふ嗚呼九月

東京

森 なほ子

秋暑し

秋晴や银杏も人も雌雄異株  
少年に薄き口髭夏了る  
秋暑し死後の話に盛り上り  
秋暑し診察室へあと四人  
秋の雨白きままなる備忘録

東京

赤座 典子

今年米

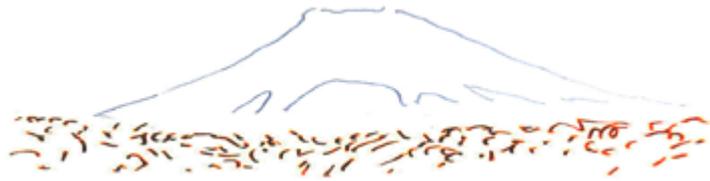
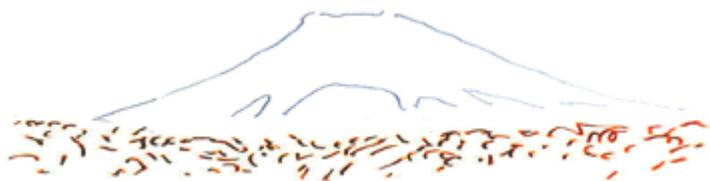
粗榿の跳ねて煌めく薄緑  
秋日今膝は如何と立ち話  
鶏頭の廃屋を背に整列す  
烏瓜ぽつりぽつりと旅近し  
タイマーに今年米よと言ひきかす

埼玉

秋川 泉

猫の病む

夕風や紫蘇摘みをれば犬の声  
ままごとのお菜になりて紫蘇匂ふ  
秋暑し電話の音が鳴り止まず  
落蟬や生あればなほ強く鳴け  
二百十日快晴なれど猫の病む



埼玉

大日向幸江

長月や

サングラス投げて走者のゴールかな  
打ち寄せる波に乗りたり青胡桃  
忘却の彼方より来し薄羽蜉蝣  
長月や 緋着る子の村芝居  
ランナーの五輪を指す百日紅

東京

七郎衛門吉保

秋彼岸

房州やブルーシートの上の月  
スクラムとタックルの絡み虫時雨  
新高梨砲丸投げの真似をして  
秋彼岸 待合室の自由帳  
この花はこの日に咲いて彼岸花

東京

篠田 純子

備長炭

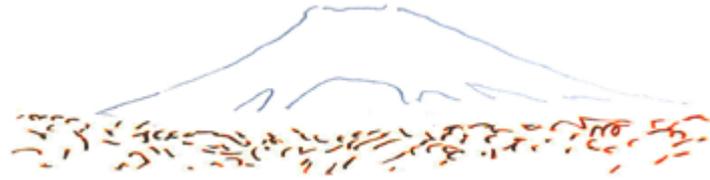
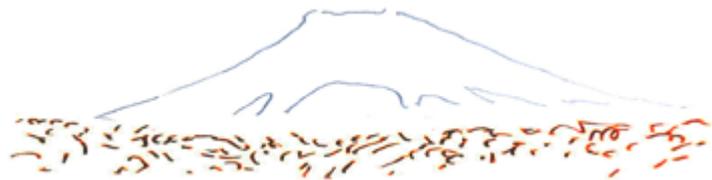
小<sup>し</sup>灰<sup>み</sup>蝶<sup>て</sup> 十あまり乱舞萩菫  
朝露や かり転がる備長炭  
築<sup>い</sup>地<sup>ち</sup>市場<sup>ば</sup>跡にクレーン十基秋暑し  
あの年の晩夏の海を忘れ得ず  
土煙り騎馬戦の馬組み直す

東京

篠田 大佳

沈黙

沈黙のボックスシート 秋日和  
秋雨や 服に詳しき警備員  
颱風過土囊の山は黒かつた  
サリ―巻くをんなふたりの旅の秋  
手紙より飛び立つてゆく秋の蠅



石川

定梶じょう

あけび笑む

まどゐの燈勉強の窓銀河垂る  
天高うダツクスフロント刻み足  
胡麻を打つ畏れるもののあるやうに  
石だたみ微かに轍良夜かな  
あけび笑むあんなに高い所にも

東京

須賀 敏子

針仕事

針仕事夜長つくづく嬉しくて  
網棚に忘れものなり今日の月  
残る蟬柵にもたれて御射鹿が池  
運動会雲の動きをスマートホン  
増税の十月一日猫戯れる

東京

田中 藤穂

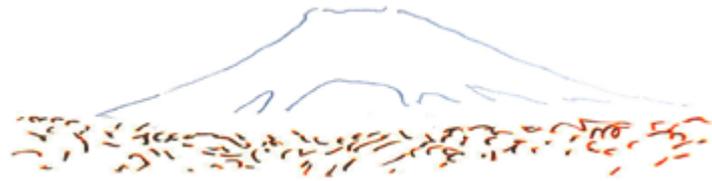
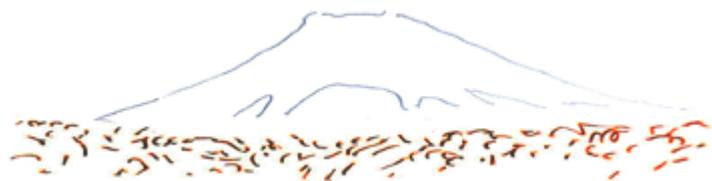
螢草

秋暑し十年若返るとの化粧  
百舌の声桐箆筒の鍵見つからぬ  
盆提灯しまひて常の夜にもどる  
家系図をたどりてをりぬ秋の夜  
螢草吾子に逢ひたき夕なり

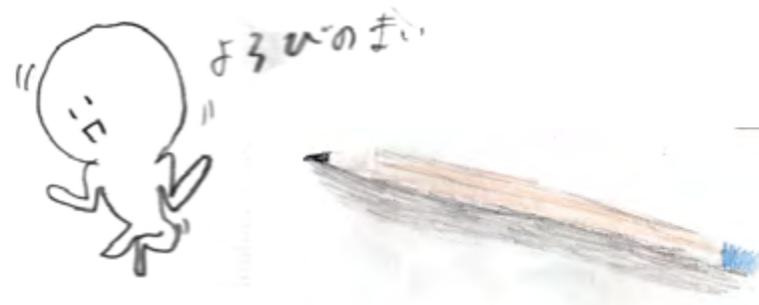
佐藤 恭子

新涼の蠅

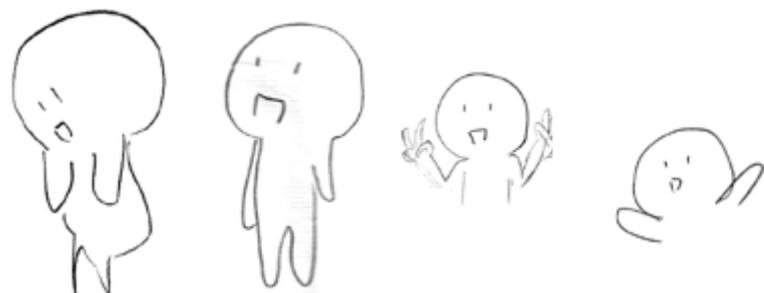
新涼の蠅も小さく見ゆるかな  
海月から届く海月の息づかひ  
秋の雨背にうけとめ錦鯉  
秋の池一寸ほどの雨とりこむ  
大きもの小さきものや木の実落つ



てふになり花になつたり日の永し	佐藤 喜孝
さらさらと物忘れして萩の露	田中 藤穂
戦時下の竹筋コンクリート敗戦忌	長崎 桂子
エアコンと我身励まし今朝の秋	森 なほ子
優しさにつつまれて差す雷遠く	山荘 慶子
点滴の管カラフルや梅雨明け	山荘 慶子
台風裡家居の腕に時計して	赤座 典子



嘶きて雲の峰飛び駿馬逝く	秋川 泉
遠花火両手広げて受け止めし	大日向幸江
秋めきて帽子を少し重くして	七郎衛門吉保
アルパカの尿長々と秋の雲	篠田 純子
赤ん坊這ひ出してゐる昼寝かな	定梶じょう
長閑なる日々ありてこそ大花火	須賀 敏子
湧水に水輪重なる万緑裡	佐藤 恭子



ひと枝も天に向かはず絲ざくら

佐藤 喜孝

別の名をしたら桜の糸桜は、高い所から懸崖のように、どつと下がっているものや、円蓋のように優雅に、くると咲いているものもあります。小さな花が規則正しく丸く下がっている、その木の中に入って、非日常的な世界を味わえるのではと。作者のこの号の最初の二句は桜です。九月号に入れたのには、何か理由があるのですよね。(典子)

風鈴や路地の隙間の佃島

佐藤 喜孝

銀座に出向いた折、全国の名品を置くショップで、銅と錫の合金製の風鈴を見つけた。滴り落ちる滴のような形、赤銅色の磨き、得も言われぬ音色、に暫く立ち止まってしまったが、六千円の値札に諦めたことがある。後日、TV番組「カンブリア宮殿」で、その風鈴を作る会社が紹介された。それを見て、改めてあの値札に納得した。この句からは、昔ながらの風情のある、江戸風鈴が見えてくる。(吉保)

一冊に短編十二月の月

須賀 敏子

近頃はついつい文庫版を探して読んでいます。長編小説でも大きさが手頃な、文庫になるのを待っていたりします。作者の読まれた本には、十二もの短編が入っていたというのです。文庫本にしてもさぞかし分厚い一冊だったのでは。それでも暑かった日中が終わり、涼しく感じられる月の下で、気持ちよく読み進まれたことでしょう。(典子)

医者へゆき庭掃き夏至のまだ暮れず

田中 藤穂

この句で作者がいつもお元気なのがよく分かります。暑さに負けてお医者さんもキャンセルし、冷房を入れた部屋で、じつとやり過ごしていた私とは雲泥の差です。句ができないわけです。秋を感じる間もなく、冬の日々になってしまいました。寒いと言って又閉じこもってはいず、藤穂さんを見習わなければと、心しています。藤穂さんのように良い句は勿論出来ませんが。(典子)

舟虫や右へ左へ逃げ去りて

長崎 桂子

勤め先の健保組合が、千葉県石井海岸に、夏場の保養施設を開設し、母親や妹と遊びに行った。海はごく透明で、夜は夜光虫を楽しめた。同時に、昼間の栈橋や波除けブロックには、舟虫が溢れかえっていた。ゴキブリに似た形ではあるが、ゴキブリと異なって団体で動き回る。何に反応するのか、リーダーがいるのか、右へ左へ団体で素早く向きを変える。五十年以上前の記憶が蘇った。(吉保)

オカリナの音すぐ止みぬ梅雨の午後

森 なほ子

オカリナの音色は素朴でとてもいい響きです。その音が聞こえてすぐ止んでしまった。作者はもつと聞いていたかったのに。近頃は材質がプラスチックのものもあるそうで、梅雨の最中のオカリナがうまく響かなかったのでしょうか。勝手な想像をしてみました。午後のちよつとした一時を切り取った句、情緒が感じられる風景です。(典子)

青 蔦 や 二 世 俳 優 父 に 似 て

赤座 典子

作者が若い頃馴染んだ俳優がいつの間にもやら歳をとり(自分のことは棚に上げ)淋しい思ひをしてゐるところに、その人の俳のある俳優がテレビ画面に出てゐる。「父に似て」とは当たり前のことであるが、そこに時の流れをあらためて知らされてゐるところ。季語はそのことを前向きに捉へてゐる。(喜孝)

唐 黍 や 朝 靄 の 中 動 く も の

秋川 泉

私の住む清瀬にも、唐黍畑は沢山あるが、朝靄がないような気がする。この句には、山があつて、川があつて、そこから靄が生まれる場所がよい。新潟県湯沢町には、そんな唐黍畑が多くある。その中で動くものは何だろうか。早朝より、唐黍の取り入れに励むお百姓さんか。人間の成果物を、堂々

と横取りする野猿か。将又イノシシか。湯沢では、もしかすると熊かもしれない(吉保)

万 歩 計 携 へ 歩 く 土 手 の 夏

大日向幸江

あの暑かつた夏、小高い場所を歩かねばならなかつた作者。どの位頑張つたかの証として、万歩計を携帯した。万歩計は私もいつもポケットに入れていて、沢山歩いた後は見るのが楽しみです。都心の美術館へ行ったときなど、一万歩を超える時があります。幸江さんの万歩計は如何でしたか。(典子)

水 無 月 を 手 招 き し た き 長 尻 雨

七郎衛門吉保

水無月は太陽暦ではおおよそ六月下旬から八月上旬にあたる。渇水でダム貯水量がニュースになる年もあつたが、近年、特に今年には台風が何度も列島を襲ひ、堤防の決壊。山崩れなど甚大な被害を及ぼした。あまりの雨量に緊急放流をしたダムもあつたほどである。吉保さんらしいウイットで水の無い月を手招きしたいほどだと、長つ尻な雨を嘆いてゐる。(喜孝)

家 鳴 り び し 関 節 コ キ と 梅 雨 長 し

篠田 純子

湿気を吸い込んで、住居の木材が膨らみ、押し合い圧し合いをして、出る家鳴音を「びし」と聞いている。我が家では逆に、冬の乾燥により、木材が離れあう「ばきッ」という大きな音に驚く。湿気の高い時期は家だけでなく、人間の身体、とりわけ関節も鳴かせるのだろう。作者の感性から

生まれる「びし」とか「コキ」とかの擬音表現で、梅雨を詠み表している句に感心している。(吉保)

手の甲や予感蚊に狙はれてゐる

定権じょう

夏場に草取りに出ると、必ずどこからともなくの蚊に出くわす。あの蚊の小さな体のどこに、人間の血をかき分けるセンサーがあるのだろうか。他方で刺される側も、高感度のセンサーが働く。超軽量で極小さな蚊が止まると、素早く手が反応する。句の詠みのように、場合によっては予感すらする。しかし高齢化に合わせて、センサー感度が落ちてきた。携帯用の蚊取り線香が手放せない。(吉保)



手鞠唄

田中藤穂

私達の子供の頃は遊びの中に歌があった様に思う。友達と丸く手を繋いで「天神様の細道ぢゃ」とか「後ろの正面だあれ」とか歌いながら大きい子も年下の子も喧嘩したり仲直りしたりしながら育っていった。手鞠歌もあつたしお手玉の唄もあつたと思う。一番始めは一の宮から始まり終りの方は西郷隆盛が出てきたような気がするが間違っていたらどなたか教えてください。



コンビニ

定権じょう

さて先月号で、「コンビニエンス・ストア」を「コンビニ」と省略して定型に遣う、ということをしないう方のこと書きましたが、お前はどうかんだ、と言われたら少々困ってしまうのです。コンビニが賑はふ七五三の昼の古い句が私にあつて、先述の先輩と知りあう前の句。勿論、何の疑いも持たず「コンビニ」の語を遣っているわけです。

弁解にたぐえるようですけど、かつて「コンビニを出でし」と遣った新聞投句を見たことがあります。「出でし」は文語、つまり古語遣いですね。これはいささかまずい。

自分の能力の内俳句を作っていたら、英語を遣っ

ておいて「出でし」なんて古語は、むしろ遣わない筈なんです。何でもいから七五三にことばを並べて季語があつたら俳句である、とはならない。英語に古語を雑ぜるのはつたない、と執られて当然ではないでしょうか。

しかし、です。「テレビ」という言葉は本来的には「テレビジョン・セット」と言つたと思うのですが、現在は「テレビ」で通つてますね。おんなじことは「コンビニ」にもある筈。人により「コンビニ」と遣つてどこが悪い、ということでしょう。「コンビニ」の略語が浸透してきている、ということでもある。

口語遣い、文語遣い。新仮名、旧仮名。いずれを用うるにしても十し文字全体の均整が大切。今、うかつに「用うる」としましたが嘗て、正しくは「用いる」である、と指摘されたことがありました。



# 『聖戦俳句集』

佐藤 喜孝

香港落ちて年立てば疾くマニラ落ちぬ

及川 貞

句会の賞にしようと思つてきた句集を時間が出来たので句会場の傍で拾ひ読みをした。家にあつても一度も開いたことがなかった。水原秋櫻子編の『聖戦俳句集』といふものものしい題の本。『馬酔木』誌上の俳句で戦中に編まれたものらしい。ぱらぱら捲つてみると「香港」といふ字句が飛びこんできた。今、中国本土と香港市民・大学生の内紛が気になつてゐたからであらう。十二月二十五日の前書きがある。開戦の年の作なのであらうか。だとすると半月ほどの日数だ。戦果を高らかに詠いあげてゐる。秋櫻子は中七を褒めてゐた。このやうな句でも表現に拘つてゐる。

わが師、瀧春一も馬酔木同人、

元旦や子等が御盾となる日如何に

瀧 春一

家族を思ひやる句でホツとする。庶民派と云はれたことも領ける。

庶民派で思ひ出したが、結婚したての頃、堀内一郎さんと共に借りてゐたアパートにおよびしたことがあつた。恭子が何を造つたのか全く記憶にないが、手料理を喜んでくれた。一郎さんの介添で少しお酔ひの足で外階段を下りられたことを懐かしく思ひ出した。このアパートの前住者は須賀忠男・敏子ご夫妻である。

緑蔭や泉に浸す壺二つ

岸秋溪子

婿の生国のビルまでの作。

「……………」この静かな景色は皇軍の保護がいかによくビルマ全土に行き互つてゐるかを物語つてゐる

やうだ。ビルマの人々は安心して建設にいそしんでゐる。それをいたはり眺める作者の心持が浸み込んでゐるのでかくも美しくやさしい句が出来たのである。」

ものはいひやうである。この俳句集には水原秋櫻子の作品は見当たらなかつた。

ここまで書いた後、偶々『日本語を知らない俳人たち』（池田俊二）で及川貞の次の句を知つた。

堪ふることいまは暑のみや終戦日

今夏、娘家族と婿さんの妹さんと六人で信州に遊んだ。一夜、山荘のベランダでバーベキューをしながらいろいろお話をした。ミャンマーの若い人の日本観が外交辞令と思ひつつも優しかったのでホツとした。こんな市井の片隅の住人でもアジアが渦巻いてゐる。

いま『聖戦俳句集』は句会で高点をとられた田中藤穂さんの手元にある。





## 定梶じょう

名月や神居古潭の溪深し 須賀 敏子

固有名詞を最大限活かしたい。〈名月や神居古潭といふところ〉。

望月や建設クレーン伸び切って

クレーンにはいろんな種類がありますので、「建設クレーン」としたのでしょね。でも、伸び切ったクレーンと満月の取り合わせですからビル建設のための起重機であること言わでものこと。〈伸び切って起重機立てる月今宵〉。

彼岸花家族のやうに咲き揃ふ

彼岸花は固まって咲く。それを「家族のやう」と形容した。うまい。但し、原句のままでは散文の語順ですね。〈咲き揃ひ家族のやうに彼岸花〉。も一度言います。「家族のやう」がうまい。

敬老日祝ひの菓子に午後憩ふ 長崎 桂子

敬老の日に「祝ひの菓子」は付き過ぎでしょうし、「午後憩ふ」の「午後」も意味があるのでしょか。桂子さんには作り過ぎの直しようかもしれませんが〈敬老日正午に臨時ニュースかな〉。

立待月遅い夕餉の窓照らす

お月さまが少し遅れて昇ってきたわけなんでしょうね。でも「窓照らす」は当たりまえ。〈立待月遅い夕餉となりけり〉。

草育ち居場所よきかな昼の虫

季節は秋ですね。「草育ち」の語は萌えているところ、ととられ兼ねない。〈草長けて居場所よきかな昼の虫〉。

熱帯魚整形外科の昼下り 森 なほ子

「昼下り」のことば。辞書には「正午を過ぎた頃。午後一〜二時頃」と説明してあります。むかし「昼下りの情事」という映画がありました。暑いゆえのもの憂さを感じとるわけですね。それに対して熱帯魚の元気なこと。場所の設定がよかった。

展上の庭園何処より飛蝗

あたまの語、「展」とあります。「殿」の誤りか、あるいは「屋」か。多分「屋」であろう、と解して読み進めます。〈屋上の庭園何処より飛蝗〉。これだけでも随分面白いのですが、どこから来たんだらうか、と問わない方が。〈屋上の庭園に来て飛蝗かな〉。

ユニクロもイオンもあつて豊の秋

「もあつて」の措辞は外してしまった方が面白いと思うのです。〈ユニクロもイオンも電気屋も豊の秋〉。「電気屋」が今一つですが、なほ子さん考えてみて下さい。

日陰なる白き一輪酔芙蓉 赤座 典子

一輪だけが日陰にある、とは考えづらいので全体が日陰に咲いている、と。朝の酔芙蓉なのです。

望の月ビルの狭間を動かざる

敏子さんの時にも言いましたが、散文の語順。〈動かざりビルの狭間の望月は〉。似た状景をむかし詠んで「ビルの廂間ひまはひ」としてしまつて、ビルに廂間いとは、と。

まんまるの田舎パン買ふ良夜かな

「田舎パン」。全く知りませんが、「まんまる」とありますのでなる程、と。「良夜」によく響

ついで。

立会のふはつとしたる勝相撲 秋川 泉

「立ちあい」のことを先に遣つてあるため、ふはつと「したる」としたのでしょうか。〈立会のふはつと立つて勝ち相撲〉。

停電の長き世界や野分あと

長き「世界」がやつぱり今一つ。〈停電の長きこの街野分あと〉。

被災地に満月ありと電話かな

勿論このままでも充分面白いのですが、〈被災の地満月ありと電話かな〉。

貨物車の行く先見てる天の川 大日向幸江

「見る」は「見ている」の約音。大きな国語辞典の用例に、十八世紀の雑俳からとっているものがあつて、そこそこ古くから「てる」が遣われているようです。けど、現代語の口語の臭いはどうしても払拭できないと思います。〈貨物車の行方見てゐる天の川〉。

蚯蚓鳴く無口を良しと言ふ祖父や  
「良しと言ふ祖父や」の措辞で、変った型の句になりました。面白い。〈蚯蚓鳴く無口が良しと言ふ祖父や〉。

払暁の夢の中まで虫の声  
中七「夢の中まで」はやや手あかのついた表現。遣うこと安易に過ぎる、とする方が必ずあります。〈払暁の夢に入りくる虫の声〉。

爽涼や白内障の快癒して  
七郎衛門吉保  
「快癒して」が凡。「爽涼や」でそのことが充分分ります。〈爽涼や白内障の手術して〉。

秋晴れに猫背忘れて上を見る  
「上を見る」は言わずもがな。〈秋日和猫背忘れてゐたりけり〉。

又ニーカー濃き色に替へ秋日和  
若い俳句。私も年寄つてはおられない。

ちちろ虫忘れたきこと思ひ出す  
篠田 純子  
はたまた思いだすから忘れたいわけでしょうね。

生身魂欲りし露兵の黒麵麴を  
「生身魂が欲しがったロシア兵の黒パンを」。直訳すればそういうことになるわけですね。であれば「生身魂が欲しがったことだロシア兵の黒パンを」のように句切れを入れたい。〈生身魂欲りき露兵の黒麵麴を〉。但し「生身魂」は生存するお年寄りをいうわけですから、〈生身魂欲り露兵の黒麵麴を〉。

をのこひく恋みくじなり今日の菊  
「をのこひく」がやや窮屈。直らないものなら仕様がなわけですけど、〈をのこ子のひく恋みくじ今日の菊〉。

彼岸花昭和の頃は川だった  
篠田 大佳  
正直申し上げて「昔は川だった、湖だった」と据える句歌、少なからずあるのですが、こんなにいい間合いで「昭和の頃」と措かれた句を知らない。川の名残りに咲く彼岸花。球根だけがそれを知っている。

少年は詰襟くづす暮の秋

もしかしたら大佳さん、「くづす」の措辞に苦勞したかもしれませんが辞書の用例には、「姿勢をくづす」「膝をくづしてくつろぐ」「表情をくづして語りあう」などがありますね。「くづす」すなわち「寛ぐこと」。それが「詰襟」とあれば男子生徒ならみんな経験。そして「晩秋」。

傘の男おれに似てをり冬隣

常識に則って作れば「誰かに似てをり」としたくなりそう。それを「おれに似てをり」とした。大佳さんの資性。そして「晩秋の雨」。むしろあつたかさを感ずるのです。

奇数部位偶数の部位春の体 佐藤 喜孝

面白いですねえ、身体に奇数と偶数の部分があるというわけ。ましてや「春の体」とあればなおさら奇数偶数の部分部分があつて然るべき。喜孝さんの剛力が心地よい。

金秋を纏り紵してゐる黄蝶

五七五を跨った句。秋の黄蝶の飛翔を「纏り紵」と形容した。

とおあまりふたつ夕日はうき草

「とおあまりふたつ」。ことさら古言を遣つたのは面白くするため？喜孝さんなら、そんなことをしない筈です。で何か別の理由がある筈。知りたい。

九月号補遺

老鶯や百間渡るオルゴール 七郎衛門吉保

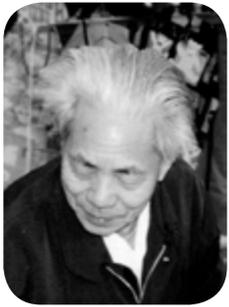
「オルゴール」は夏鶯の形の形容でしょうか。「百間」はその声のわたつてくる距離のことなんでしょうね。私の読みが当たっているのなら、「老鶯」の鳴き声を喩えるに「オルゴール」を宛てること新奇。単純に「奇抜」な喩えとして読みすすぐか、いや面白いととるか、は読み手それぞれ。私は、「百間渡る」の措辞が充分に効いていると思いますので掲句を可としたい。約二〇〇メートル。「百間渡る」で作者と鳴き声のあいだに谷があったり、「オルゴール」のことでメタリックに響く山中の鳴き声を句から聞きとったりできる、と思うのです。何しろ初夏が鶯の繁殖どき。よく鳴きます。

温泉の町に夜の蛙の声枯れず

蛙の音が「止まず」ではなく「枯れず」ですから薄暑の頃にまだ鳴く蛙、なんででしょうか。私はそう理解しました。

中川句寿夫さんをしのんで 四

鳥渡る村を輪島のお膳売り  
 落葉して炭焼く道へ細るなり  
 朝市に売る楽しみの大根洗ふ  
 自分のことは自分で酒をあたためる  
 色足袋や生涯妻のここのもん  
 井戸替への浄めの風呂が沸いてをり  
 何もせぬ声が混りて井戸浚へ  
 撃たれたく父が出てくる水鉄砲  
 曲らうと太らうと秋の茄子かな  
 なささうなところも探し神の留守



好きな子は全部と  
 いていい程。十句  
 選ぶのは大変だっ  
 た。能登の風土に生  
 きた句寿夫さんの生  
 涯が凝縮されてい  
 た。仕事を終えた後  
 の呟き。思わず共感  
 し頷く句。引き締め  
 無駄のない男性でき  
 な句、その確さに  
 私達の経験していな  
 い事でも実感として  
 伝わる。一枚の写真  
 があった。句集の主  
 と奥様、その人生を  
 垣間見させて戴い  
 た。お会いして俳句  
 の話を伺いたかった  
 としみじみ思いま  
 す。

森なほ子 抄

しかし、です。「温泉の町の夜」にわざわざ蛙を啼かせるのはややミスマッチと言っているのでは。むしろ、蟾蜍を登場させた方が。いや、平凡？

追悼の名前告げられ揚花火

「追悼」は、亡くなった方の生前をしのぶこと、ですね。当然のことによく知っていた方。その「名前を告げられ」とはどういう状況なんでしょうか。そして取り合わせた「揚花火」がまたひとつ理解できない。花火見物の最中に、あの方が亡くなられたよ、と告げられた、の意なら表現に無理があります。

ヴォイストレーニング

須賀敏子

「健康のためのヴォイストレーニング」無料体験のチラシが、三月ポストインされた。今まで音楽とは無縁の生活をしてきたが、新しいことにチャレンジ。

四月より月二回一時間のレッスン。まず三十分発声練習、十五分のリトミック、最後の十五分で唱歌等馴染みの歌を一曲歌う。すでに始めて七ヶ月が過ぎたが、声が出ていない。



玉蟲は千年前のたまむし色

佐藤 喜孝

「あを」六月号

玉蟲は美しい。翅の表面は金緑色で紫色の縦線が走り、腹部は金赤色、見る角度により色も変わる。法隆寺の国宝、玉蟲の厨子の須弥座は木製黒漆塗だが上部宮殿形の金銅透かし彫りの部分の下に玉蟲の翅が貼り付けられていた。今は損なわれてほとんど見えない。厨子は七、八世紀ごろ作られたそうだから、千年以上時を経ている。宮殿内貼りのまばゆい光の中に立っていた金銅仏に当時の人々はさぞ救われ慰められたことだろう。玉蟲、千年と聞けば、はるかな時代へ心が飛ぶ。更に読み返すうちに、「玉蟲」と「たまむし色」であることに、少し思いの向きが変わってきた。たまむし色とは、見方によって変わる曖昧さにも通う。人の気持も長い間に変わっていく心許なさも漂い、時の流れの非情さも忍び寄る。これから又、千年ののち、玉蟲はどんな色に見えてくるのであろうか。

老桜けむりのやうな幹で立つ

喜孝

山桜は凡そ三百年と言われるが、エドヒガンとオオシマザクラとの交配で生まれたソメイヨシノの寿命は七十年ほど。戦後の焦土に植えられた桜が、この国の変遷を抜けて、揃って衰えてくるかと思えば、何とも切ない。ここにも茫漠と過ぎ行く時への愛惜が滲えられている。

〔萱〕十月号より転載させて戴きました。

あをキーワード俳句辞典(はちーはち)

鉢

七鉢の蘭蕾ある除夜の鐘  
茹で上り鉢にちんまり菠稜草  
金魚鉢畳屋さんは根津育ち  
伏せられて片隅に濡る陶火鉢  
風信子鉢から露地に又の年  
気がつけば鉢植葱に葱坊主  
夏の蝶鉢合はせする交叉点  
朝顔は青色の鉢投票日  
鉢植えのトマト熟せり声弾む  
小鉢には味噌味香る拔菜漬  
鉢巻を捨てきれず居て神無月  
吸殻を探す火鉢や父の影  
シクラメン鉢を回せり陽に向けて  
万房を鉢へ及ばせ藤の刻  
干潟に穴無数鯊の子鉢合せ  
水遣りの朝顔の鉢持ち込まれ  
鉢鉢に借景入れる菊日和  
建国の日やすりこ木と播鉢と  
冷まじや庭の鉢植茶褐色  
薄紅の芋茎をまづは小鉢にて

田中 藤穂  
長崎 桂子  
田中 藤穂  
赤座 典子  
七郎衛門吉保  
山莊 慶子  
佐藤 恭子  
石森 理和  
山莊 慶子  
赤座 典子  
大日向幸江  
七郎衛門吉保  
黒澤 佳子  
井上 石動  
長崎 桂子  
石森 理和  
長崎 桂子  
定梶じよう  
長崎 桂子  
赤座 典子  
長崎 桂子

ビブラフォンの桴も弾んで春隣  
太棹をくどく厚撥星冴ゆる  
右に桴左にマイク音頭取る  
御輿ばかパチンコよりも騒がしき  
椿の実ゴムパチンコの鉄砲玉  
樑や初恋の人孫連れて  
初恋や掬ひ損ねし金魚かな  
トマト食む初恋の味とほきかな  
初恋や梨の花咲く多摩堤  
初恋や蕊の色香の白薔薇  
初恋や始めて食るかき氷  
爽籟や羽を廻して発電す  
雪溶かす地熱発電大気清む  
風力発電南風にくまじ回りけり  
発電のつばさの止まる夏はじめ  
親子して手廻し発電夏期講習  
並びたる風力発電夏の天  
露团团風力発電翼休む  
夏草や風力発電廻る廻る

齊藤 裕子  
井上 石動  
篠田 純子  
堀内 一郎  
七郎衛門吉保  
河合 笑子  
須賀 敏子  
長崎 桂子  
石森 理和  
佐藤 恭子  
大日向幸江  
篠田 純子  
須賀 敏子  
定梶じよう  
篠田 純子  
藤野 寿子  
須賀 敏子  
須賀 敏子

撥・桴

撥捌き桴子手拍子秋祭

初孫 桂子

初孫の二等身なり春大根  
初孫といふ銘の酒を歳暮とす

派手

翡翠の狩の衣の派手やかに  
初時雨派手なブーツに追越され

鳩

雪の朝我を目掛けて鳩百羽  
秋日和バス待つ人に鳩ならぶ  
睦みあふ鳩にかかはり春時雨  
曇り空鳩の啼く声梅雨の声  
噴水の片膝立や鳩口説  
冬温し鳩ゆつたりと歩きぬて  
鬼やらひ早朝の庭に鳩の来し  
渚にも冬のなごみや鳩群るる  
鳩の恋鬼子母の神のうす笑ひ  
ペリカンの噴水雀鳩鴉  
嶺青く囲む街空鳩澄めり  
鳩の餌コツンコツンと寒鴉  
緑陰の鳩幼子の歩で逃げる  
隼に追はる白鳩生き延びよ  
生くことを前提にして冬の鳩  
嫁が君ホモサピエンス鳩菌  
ビル嵐鳩をとばして逃げにけり

渡邊 京子  
赤座 典子

木村茂登子  
森山のりこ

石森 理和  
赤座 典子

早崎 泰江  
早崎 泰江

関口 ゆき  
赤座 典子

長崎 桂子  
鎌倉喜久恵

後藤 志づ  
篠田 純子

渡邊 友七  
石森 理和

赤座 典子  
篠田 純子

篠田 純子  
篠田 純子

芝 尚子  
長崎 桂子

日向ぼこ鳩を友とすホームレス  
鳩の首しきりに動くきさらぎの土

ほろほると鳩が人呼ぶ暮の春

巢ごもりの鳩みじろぎぬ暮の春  
放鳩の空のまるみよ虹炎えて

鳩の影人の影美術館秋

桜咲き甘納豆買ふ鳩の町  
鳩尾のへこみが父似海びらき

天窓に夕焼の濃し鳩の影  
破芭蕉鳩吹く風が煽つべく

傘をさし酒呑んでをり冬の鳩  
病囚や春の窪みに鳩啼かす

鳩の恋敗者下りて見詰めをり  
青東風や街燈の鳩押合へる

梅雨曇鳩や鴉の声ばかり  
また鳩が出て鳴く時計熱帯夜

空高く鳩飛び立てり原爆忌  
秋霖や大屋根に鳩身じろがず

鳩の白眼鳩の黒眼や日脚伸ぶ  
泳げない鳩を尻目に鴨潜く

夜なべまだつづく鳩舎に鳩ねむり  
松葉敷く鳩とのぼりし石の階

鳩翔つて永き日の宙汚しけり

鈴木多枝子  
早崎 泰江

渡邊 友七  
渡邊 友七

鳩ときて鳩と下りたる花の坂  
電線に鳩の留まれる朝曇  
梅雨最中土鳩の声のくぐもれり  
花いてふ地に鳴き交はす晝の鳩  
あきつ島待てば海路に鳩あきつ  
春の雪ひもじき鳩の歩きをり  
春日中鳩を翔たせて救急車  
鳩集ふ喇叭奏でる桐の花  
鴉の子鶉鳩雀に圍まるる  
菜種刈遠目で囲む鳩の群  
歩きゆく猫犬人鳩冬隣  
鳩時計鳩がでぬま初明り  
時計の鳩鳴きに出てきて日脚伸ぶ  
のうぜんや鳩の赤足ひたひたゆく  
春の雲旋回つづく鳩の群  
梅雨入りの予告のごとし鳩の声  
砂利道の鳩の歩足にあはせ汗  
秋澄むやもこりと子鳩吾に向く  
鳩どもと歩く冬日のホームかな  
縁側は青葉の匂鳩が鳴く  
朝夕に鳩含みなく梅雨曇  
淡雪や喰はれた鳩のつばさ美し  
寒の入り鳩に雀に寄添ひて

佐藤 恭子  
赤座 典子  
鈴木多枝子  
佐藤 喜孝  
藤野 寿子  
篠田 純子  
芝 尚子  
長崎 桂子  
佐藤 喜孝  
山莊 慶子  
佐藤 喜孝  
佐藤 恭子  
定梶しよう  
堀内 一郎  
石森 理和  
早崎 泰江  
佐藤 恭子  
赤座 典子  
井上 石動  
田中 藤穂  
早崎 泰江  
篠田 純子  
大日向幸江

緑鳩の海辺にむれる昼さがり  
窓の外にこちら見てゐる鳩の雛  
糸のこ草指無き鳩の動かざる  
枯草踏む音すずめ鳩カラスひと  
鳩サブレぺきんと割れて七五三  
冬の雨銀座の鳩はよく歩く  
枯葉敷く階鳩とのぼりゆく  
温暖化歩道啄む鳩に寒風  
秋暑し群れて水浴ぶ街の鳩

馬頭

むかし道馬頭観音冬紅葉  
街探検馬頭観音福寿草  
岩陰の馬頭観音昼の虫  
しぐるるや赤い布垂る馬頭尊  
穏やかに馬頭琴聞く春の宵

パトカー

ただならぬパトカーの音百日紅  
パトカーの音遠くあり十三夜

波止場

夫と来しメリケン波止場春霞  
鬼の形相もちバトン継ぐ青葡萄  
秋爽やバトンパス冴え銀メダル

秋川 泉  
篠田 純子  
篠田 純子  
篠田 純子  
大日向幸江  
佐藤 喜孝  
佐藤 恭子  
長崎 桂子  
赤座 典子  
須賀 敏子  
須賀 敏子  
芝 尚子  
竹内 弘子  
森山のりこ  
早崎 泰江  
早崎 泰江  
秋川 泉  
石森 理和  
七郎衛門吉保

日向ぼこ鳩を友とすホームレス  
鳩の首しきりに動くきさらぎの土

ほろほると鳩が人呼ぶ暮の春

巢ごもりの鳩みじろぎぬ暮の春  
放鳩の空のまるみよ虹炎えて

鳩の影人の影美術館秋

桜咲き甘納豆買ふ鳩の町  
鳩尾のへこみが父似海びらき

天窓に夕焼の濃し鳩の影  
破芭蕉鳩吹く風が煽つべく

傘をさし酒呑んでをり冬の鳩  
病囚や春の窪みに鳩啼かす

鳩の恋敗者下りて見詰めをり  
青東風や街燈の鳩押合へる

梅雨曇鳩や鴉の声ばかり  
また鳩が出て鳴く時計熱帯夜

空高く鳩飛び立てり原爆忌  
秋霖や大屋根に鳩身じろがず

鳩の白眼鳩の黒眼や日脚伸ぶ  
泳げない鳩を尻目に鴨潜く

夜なべまだつづく鳩舎に鳩ねむり  
松葉敷く鳩とのぼりし石の階

鳩翔つて永き日の宙汚しけり

渡邊 京子  
赤座 典子

木村茂登子  
森山のりこ

石森 理和  
赤座 典子

早崎 泰江  
早崎 泰江

関口 ゆき  
赤座 典子

長崎 桂子  
鎌倉喜久恵

後藤 志づ  
篠田 純子

渡邊 友七  
石森 理和

赤座 典子  
篠田 純子

篠田 純子  
篠田 純子

篠田 純子  
篠田 純子

篠田 純子  
篠田 純子

篠田 純子  
篠田 純子

芝 尚子  
長崎 桂子

鈴木多枝子  
早崎 泰江

渡邊 友七  
渡邊 友七

## あとがき

### ランナーの足の確かさ神の旅

十一月十日のNHK俳句、題「神の旅」。選者は長嶋有さんでの入選句、作者は大日向幸江さんです。おめでとうございます。見たことのない番組なのでどんな雰囲気か分かりませんが、一席から三席までご紹介します。

神の旅はやく着きすぎてもアレだし 畑和博  
中辛の思はぬ辛さ漱石忌 折戸洋  
お守りに重さありけり神の留守 久保田聡

### 新会員ご紹介

篠田大佳<sup>ひろよし</sup> 様

## 題詠シリーズ募集

### 題「紅」

三十句  
締切 令和二年一月末。(未確定)  
参加費 五百円  
作品集は参加者のみにお渡しします。

二〇一九年十一月号

発行日

十一月二十四日

発行所

東京都中野区中央2-50-3

電話

090-9828-4244

ファックス

03-3371-4623

印刷・製本・レイアウト

竹僊房

カット/須賀忠男・福井美佐子・テイリ エイマ

表紙・佐藤喜孝

会費 一〇〇〇〇円(送料共) / 一年

ゆうちょ銀行(普) (店番018) 4586402

佐藤 喜孝(サトウ ヨシタカ)